

現代社会の課題と共創

目次

序：分断の時代における共創	3
---------------	---

第I部 グローバル社会と文化

第①章 友と共に作る —— 近世後期の文人・田能村竹田の旅と交遊	8
----------------------------------	---

1. はじめに 8
2. 山陽との共作《澱川邂逅之図》 10
3. 山陽からの贈り物を描いた《蘭竹同瓶図》 15
4. おわりに 18

第②章 「大阪人でない」ことをすること —— 他者の物語を理解する	22
-----------------------------------	----

1. 大阪人なのにおもしろくない 22
2. カテゴリーとカテゴリー化 23
3. カテゴリーを暗黙的に使う 25
4. 語り手のカテゴリーを理解する 27
5. 事実と権利 30

第③章 家族との関係からみる女性の貧困と自立 —— NPOの担う共創的役割	36
---------------------------------------	----

1. はじめに 36
2. 社会保障制度における日本の特徴 37
3. 大阪市の事例 39
4. 事例から考えられること 41
5. おわりに 43

第④章 女性の沈黙の理解可能性 —— 認識的不正義と成員
カテゴリー化装置の観点から ——49

1. 女性は見た目が綺麗な寿司が好きだから 49
2. 「判断を行う主体である」ことを否定する 51
3. 「女性の沈黙」の理解可能性 53
4. 誰かの証言を聞く 58

第⑤章 日本の文化をいかに伝えるか —— 画家・長谷川
三郎の晩年の活動について ——65

1. はじめに 65
2. 2人のアメリカ人との交流と新たな作風の模索 66
3. 海外での展覧会への参加 70
4. おわりに 73

第⑥章 SDGs時代のケニアにおける教育普及の課題と共創
—— 学びと仕事の接点 ——78

1. はじめに 78
2. ケニアにおける教育の普及 79
3. 学校と生業との関係 83
4. おわりに 86

第⑦章 女性・平和・安全保障（WPS）の展開と課題 ——
共創の視点から見る平和構築と国際規範の変容 ——91

1. はじめに 91
2. 国連安保理決議 1325 の歴史的背景 92
3. WPSへの批判と可能性 97
4. おわりに 99

第Ⅱ部 社会創造に向けた政策、ビジネス

- 第⑧章 紛争後の社会で共創を生み出すビジネス
 —— ボスニア・ヘルツェゴビナの事例 —— 106
1. はじめに 106
 2. ボスニア・ヘルツェゴビナの歴史 107
 3. BHクラフツ社ができるまで 109
 4. BHクラフツ社と編み物をする女性たち 111
 5. おわりに 113
- 第⑨章 「災害大国」日本が学ぶべき「共創」の力 —— 熊本
 地震から見据える未来の防災 —— 117
1. はじめに 117
 2. 想定外の事態に直面した熊本地震 118
 3. 災害支援における「情報の不均衡」と共創の可能性 119
 4. おわりに 124
- 第⑩章 自治体の主体性と「共創」の試み —— 原子力の
 「共創会議」の事例から —— 128
1. はじめに 128
 2. 原子力の共創会議 129
 3. 「共創」は「自治」なのか 133
 4. おわりに 137
- 第⑪章 カスハラ時代の市民行政関係 —— ガバメントと
 ガバナンス —— 140
1. はじめに 140

2. ガバメントの主体的役割：東海村の「原子力サイエンスタウン構想」	141
3. 市民と行政の関係の基本的前提	143
4. おわりに	148
第12章 住民と関係人口による地域価値の共創——岡山県西粟倉村の地域づくり——	152
1. はじめに	152
2. 関係人口との協働による地域づくり	153
3. 地域の価値共創を促す取組み	157
4. おわりに	159
第13章 外国人受け入れと地方の未来——移住・雇用・共創の視点から考える——	164
1. はじめに	164
2. 事例研究	166
3. 事例から学んだこと	172
4. おわりに	173
第14章 リモートワークを活用した自律したメンバーによる共創の仕組みづくり——ITベンチャー企業を事例として——	177
1. はじめに	177
2. テレワーク／リモートワークに関する先行研究	178
3. リモートワークと経営施策：株式会社オシンテック（OSHINTech）事例	179
4. 考察	186

おわりに..... 191

執筆者一覧..... 193

現代社会の課題と共創

序：分断の時代における共創

2015年9月に開催された国連総会において、『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ（2030Agenda）』が採択され、2030年までに達成すべき持続可能な開発目標（SDGs）として、貧困撲滅やジェンダー平等、国内外の不平等是正、気候変動対策など17の世界的目標と169の達成基準及び232の指標が示された。しかしながら、達成目標まで5年、採択から10年を迎える現在、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルとハマスの戦闘、ヨーロッパにおける極右政党の台頭と移民政策の転換、トランプ大統領による多様性政策の撤廃など、SDGsが目標とする国家・社会・人・地球の調和とは相反する動きが加速し、国際的な協調と課題解決に向けた取組みは後退しているようにみえる。国内においても人口減少と高齢化の進展や地震や台風、洪水や土砂災害などの自然災害の発生などの課題に加え、COVID-19感染拡大によるリモートワークの導入や外国人移住者の増加などにより社会は急激に変化している。

社会の分断や対立が世界的に広がる中で、注目されているのが「共創」の概念である。共創（co-creation）概念は、2004年に発表された論文“Co-creating unique value with customers”（Prahalad & Ramaswamy 2004）*が発端となって広がったが、最近では、ビジネスだけでなく様々な場で「共創」という言葉が使われている。共創とは、異なる背景や価値観を持つヒトや組織が、協働によって新たな価値を創造することを意味し、経済的価値の創造だけでなく社会的価値の創造についても意義を持つものであり、学術研究においても複数の分野で議論の対象となっている。だが現在、分野を横断した学際的な研究は十分ではなく、複雑化する社会課題の解決に向けて共創の実務的・理論的体系化を図るためには、分野を超えて専門知を持ち寄り、学際的研究を進めていくことが必要になっている。

本書は、このような社会的要請に応え、大阪経済大学国際共創学部 of 研究者を中心とした人文科学・社会科学分野の研究者が、それぞれの研究成果を提示し共有することで、共創概念の精緻化・発展と国内外の様々な課題の解決に

資することを目的としている。

共創によって価値を創造するには、多様な主体が対話を重ねながら協力していくことが求められる。そのためには、互いの違いを受け入れ、相手の文化や背景を理解し尊重することが肝要である。そこで本書は、共創の促進に影響を与える「他者理解」「文化」「経験」「交流」「対話の場」や、共創の阻害要因となる「偏見」「ジェンダー規範」などについて考察し、併せて世界的課題について論じる第一部と、具体的な共創の取組みの事例と事例分析による知見を提示する第二部によって構成する。

第一部「グローバル社会と文化」では、共創の前提となる他者や文化への理解（2章・4章・5章）、共創を左右する交流と対話の場の創出（1章）に関して考察するとともに、格差や安全保障という現在における世界的な課題について論じる。具体的には、女性の貧困（3章）や教育普及がもたらす影響（6章）、平和構築（7章）について取り上げ、共創の視点から分析し、偏見やジェンダー規範、常識への盲従など共創を阻害する要因についても検討を加える。

第二部「社会創造に向けた政策・ビジネス」では、共創による新たな社会的価値の創造に向けた政策・ビジネス分野での具体的な取組みの事例と事例分析によって得た知見を提示する。それぞれの章では、紛争と分断（8章）、自然災害と復興（9章）、原発誘致と地域振興（10章）、市民と行政の関係のあり方（11章）、持続可能な地域づくり（12章）、多文化共生と経済活性化（13章）、労働問題への対応（14章）という社会的な課題に対し、共創によって新たな価値を生み出すことで解決に向けて取り組む事例を取り上げている。

なお、各章の執筆者の専門分野は、社会学、文学、法学、政治学、経営学、政策科学、人間科学など多岐にわたり、共創を見る視点も多様で、そこで論じる理論や概念はそれぞれの分野の先行研究から導かれたものであるため、各章では理論的な意味内容を正しく伝えるために、関連する理論・概念についての解説と議論を深めるためのColumnを設けている。

本書の執筆にあたっては、3回にわたって研究会を実施し、それぞれの研究内容についての発表・意見交換と交流の機会を設けた。本書はまさにさまざまな専門分野の研究者の共創によって生まれたものである。

共創に関する人文科学・社会科学の研究者による学際的な研究は初めての試みであり、本書ではまず多岐にわたる分野における研究成果を提示し共創概念の体系化への道を一步踏み出した。気候変動や環境汚染、自然災害、感染症などの地球規模の危急で複雑な問題に対処するには、性や年代、国や国籍、宗教や文化の違いを超えて多様な「知」を持つ人びとが協力して取り組んでいくことが必要であり、対立と分断が進む現在においては、共創が持つ意義は大きい。本書が共創概念の体系化と社会的課題解決の一助となれば、望外の喜びである。

2025年10月

大和里美

* Prahalad, C. K. and Ramaswamy, V. (2004). "Co-Creating Unique Value with Customers." *Strategy and Leadership*, Vol.32, No.3, pp.4-9.

第 I 部 グローバル社会と文化

第 1 章

友と共に作る

—— 近世後期の文人・田能村竹田の旅と交遊 ——

1. はじめに

17世紀末、オランダ商館付医師として日本に滞在していたエンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer、1651-1716）は、2度の江戸参府（長崎出島のオランダ商館長が江戸の徳川将軍に貿易許可のお礼を献上する行事）に随行し、その際の様子を『日本誌（*Geschichte und Beschreibung von Japan*）』（1777-79）に詳録した。その中に、以下の通りの記述が見られる。

この国の街道には毎日信じられないほどの人間がおり、二、三の季節には住民の多いヨーロッパの都市の街路と同じくらいの人が街道に溢れている。私は、七つの主要な街道のうちで一番主な前述の東海道を四度も通ったので、その体験からこれを立証することができる。これは、一つにはこの国の人口が多いことと、また一つには他の諸国民と違って、彼らが非常によく旅行することが原因である。¹⁾

1683年にスウェーデンを発ち、ユーラシア各地を巡り、極東の島国にたどり着いたケンペルの目に映ったのは、いずれの国にも増して人びとが「旅」を楽しんでいる光景であった。江戸時代になると、旅は、それ以前のように特権階級に属する者や仏教僧などに限られた特別な営みではなく、庶民にも開かれた。背景には、街道や舟運、^{しゅうん}宿場や旅籠（宿）など、旅に不可欠なインフラの急速な整備があった。

旅の目的もまた多様であった。諸藩の大名とそれに従う家臣たちは参勤交代のために江戸と国元とを往還し、若き武士は遊学のために郷里を発った。僧

は修行のために諸国を遊行し、多くの庶民が現世利益を求めて諸寺社に参詣しつつ、名所案内記を読んで物見遊山に出かけた。

諸学芸に携わる者にとっての旅、すなわち遊歴は、技芸を磨くための修練の場であると同時に、遠地の同好と出会い互いに刺激を与え合う機会ともなった。俳聖・松尾芭蕉（1644-1694）が晩年の多くを旅にささげ、日本文学史上の金字塔たる『おくのほそ道』（1702）や『笈の小文』（1709）などの俳諧紀行をものしたことは、その好例といえよう。

さて、本章では、遊歴を創作の糧とした田能村竹田（1777-1835）という江戸時代後期に活躍した文人を取りあげる。竹田は、幼名は磯吉^{いそきち}、名は孝憲^{たかのり}、字は君彝^{くんい}、通称は行蔵、号は竹田^{くじょうせんし}の他に九疊仙史なども用いた。豊後国岡藩（大分県南西部）の生まれで、その学才を認められ、1798（寛政10）年より藩校「由学館」の教授者に就いた。ところが、1811-1812（文化8-9）年に岡藩を中心として起こった一揆の後に職を致仕して隠居に入る。もともと隠遁生活に対する憧れを抱いていたこと、一揆に関する建言書が藩に受け入れられなかったことなどが、隠居の契機になったと考えられる。そして、1835（天保6）年、大坂の岡藩邸にて客死した。

なお、日本における「文人」とは、江戸時代中期頃より漢文学の隆盛を背景に登場した、中国文化に憧憬を抱く、詩文および琴棋書画などの諸芸を修める者たちのことを指す。江戸時代後期から幕末、そして明治初期にかけて多くの文人と呼ばれる者たちが登場したが、田能村竹田はその代表者といえる。

以下では、竹田が行った幾度もの旅のうち、とりわけ1823（文政6）年の京都への遊歴に注目し、竹田の盟友・頼山陽^{らいさんよう}（1780-1832）との交遊を跡づける。そして、その際に作られた2人の関係性を象徴する2つの作品《澗川邂逅之図》（1823）および《蘭竹同瓶図》（同年）の分析を試みる²⁾。以上を通じて、旅の意義、そして、友との交遊はただ出会うことの喜びのみならず、新たな作品の共創を可能とする営為であったことを示す。

2. 山陽との共作《澗川邂逅之図》

「万卷の書を読み、万里の路を行く」という文人精神を象徴する言葉がある。もとは中国の明末に活躍した董其昌^{とうきしやう}（1555-1636）の『画禅室随筆』に見えるものだが、田能村竹田も自身の画論『山中人饒舌』（1835）に引用し、広い読書と旅こそが画の道の大家となるための条件をなす、といったようなことを述べている。

言葉だけではない。竹田のとりわけ後半生は旅によって彩られた。隠居後には、1814（文化11）年の京遊を皮切りに、何度となく故郷を離れ、行く先々やその途上で文人仲間と交遊を重ねた。旅の中で、『目撃佳趣画冊』（1829）や『蓬窓幽興画冊』（同前）など、多くの傑作を生み出した。

旅の行き先として京坂が選ばれることが多かった。その動機のひとつに京都に住む莫逆の友・頼山陽の存在があった。山陽は名を襄^{のほる}、通称は久太郎、字を子成^{しせい}といい、号は山陽のほかには三十六峯外史^{ほうがいし}などを用いた。『日本外史』の著者として広く知られる。大坂は江戸堀の生まれで、父は広島藩儒の頼春水^{らいしゆんすい}である。1800（寛政12）年に脱藩を企て、そのために後に廢嫡となった。1811（文化8）年に上京し私塾を開き、以後は京都を拠点に活動した。1832（天保3）年、鴨川西岸に建てた水西荘にて没した。

竹田がはじめて頼山陽と相見えたのは、1811（文化8）年、2度目の京遊の折に大坂・生玉の持明院に留まっていたときのことであった。その喜びを山陽は、竹田宛の書簡に「此間は、浮生半日之閑どころには無之、得半生好友候て、一見如故、近来之佳興にて御座候」³⁾と綴っている。すなわち、この度は、忙しい世のつかの間の休息などではなく、生涯にわたって付き合うべき友を得ることができた。竹田は初対面ながら旧知のようであり、近頃では味わうことのできなかった歓びである、という。なお、書簡には『三体詩』（中国の宋代に作られた唐代漢詩集）に載る詩人・李涉^{りしやう}の七言絶句「題鶴林寺（鶴林寺に題す）」の結句にある「浮生半日閑」の引用が見え、文人らしい風雅な遊びがうかがえる。

その後、1814（文化11）年には尾道で偶然に再会し、さらに1818（文政1）年には、今度は山陽が九州旅行の途上に竹田の故郷・豊後竹田を訪れた。豊後竹田に着いた山陽は、竹田から「半醒半酔遊三日而後発可也（半醒半酔遊ぶこと三日にして、後に発すること可なり）」⁴⁾、すなわち、ほろ酔い気分で3日間遊び、その後に出発するのがよい、と晩唐の詩人・杜牧の漢詩「念昔遊（昔遊を念ふ）」^{せきゆう}にみえる詩句「半醒半酔遊三日」を引いて、留まるよう促された。それを受けた山陽は、当初は1日の滞在予定であったところを変更し、結局7日間留まった、という佳話も伝わる。

それより5年後の1823年、今度は竹田が京坂を目指して1年以上におよぶ旅に出た。目的は、自身の子・太一（田能村如仙^{じよせん}、1808-1896）を京都の蘭医・小石元瑞^{こいしげんすい}（1784-1849）に入門させること、また、元瑞に自身の身体を診てもらうこと、そして、京坂の文人たちと交流を持つことなどであった。以下に山陽と出会うまでの旅程を簡単に振り返っておく。

1月26日（西暦では3月8日）に豊後竹田を出発した竹田は、2月上旬に船で尾道（備後）に着き、そこに1か月弱逗留し、当地の文人たちと交流した。3月上旬には尾道を出て、神辺（備後）にある廉塾^{れんじゆく}の菅茶山^{かんちやざん}（儒学者、1748-1827）を訪ねた後、鞆から発船して、3月12日に明石に上陸した。そこから陸路で兵庫に向かい、再び船で14日に大坂に入った。

4月17日（西暦では5月23日）、伊丹に遊んでいた山陽が竹田のもとに来訪した。同日の竹田の「日記」には、以下のようなことが書かれている。すなわち、竹田のところに頼山陽の使いとしてその門人の後藤松陰^{ごとうしょういん}（1797-1864）が来て、山陽が「淀川で舟遊びをしよう」と言っていると伝えた。そこで、午後、武内確斎^{たけうちかくさい}（戯作者、1770-1827）を訪ね、二人で肥後橋の南で舟を買い、難波橋まで乗り付けた。山陽と岡田半江^{おかだはんこう}（文人画家、1782-1846）に迎えをやって、船頭に大川の桜宮の方へ遡るように伝えた。酒を酌み交わし、詩を詠み、楽しく過ごした。夜になって山陽と別れ、山陽は夜行の舟に乗って京都へ帰って行った⁵⁾。

この時の舟遊びの様子を作品化したのが《澱川邂逅之図》（図1-1）である。この種の作品（文人画）を鑑賞する際は、上部にある賛（漢詩文）と画（山水）

の双方の読解が求められるが、ここではひとまず上部の賛の右側から読み進める。

右上の「一岸」からはじまるのは山陽が詠んだ漢詩である。そこには、以下の通り書してある（原漢文と書き下し併記する。続く地の文に大意を添える。落款がある場合は□で括った。以下、すべて同様である）。

一岸垂楊繫小船	一岸の垂楊に小船を繋ぐ
相逢道舊咲囂然	相逢ひて旧きを道り咲ひて囂然
とす	
岡城分手如前日	岡城に手を分ちしは前日の如し
儂指勿々已六年	儂指すれば勿々として已に六年

癸未之夏澗江泛舟邂逅 竹田詞兄賦贈 襄 頼襄
 癸未の夏、澗江に舟を泛べて邂逅す。竹田詞兄に賦して贈る。襄

小さな舟を岸辺の枝垂れ柳に繋げた。昔の思い出を語り合えば、にこやかな笑みがこぼれる。竹田の故郷の岡城下で別れたのが、まるで昨日のことに思われる。儂指、すなわち指折り数えてみれば、早いものですすでに6年経っていた（1823年も含めて数えると1823年は1818年から6年経っていることになる）。1823年の夏のこと。淀川に舟を浮かべて出会えた喜びを詩にし、詩友の竹田に送る。襄。

なお、墨継ぎされて不自然に太くなっている「六年」の字については、ティム・ザン氏も指摘する通り⁶⁾、「五」と書こうとしたところ、実際は「六」であることに気付き修正したためであろう。

次に、一段落ちたところに書してある漢文を読む。

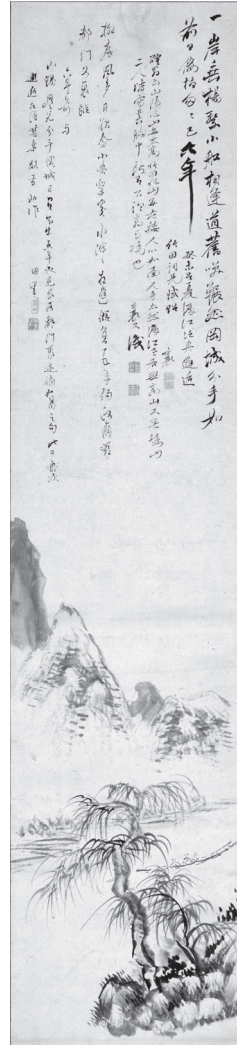


図 1-1 田能村竹田・頼山陽画賛《澗江邂逅之図》紙本墨画 127.3 × 27.2cm、1823年、メトロポリタン美術館蔵

確翁云山陽作山每太高竹田作山每太矮人心如面人手亦然澗江左右無高山又無矮山
二人皆寫其胸中所有不論高与矮也 襄又識 襄印 子成

確翁云く、山陽、山を作すに毎に太だ高く、竹田、山を作すに毎に太だ矮し、
と。人心は面の如く、人手も亦た然り。澗江の左右に高山無く、又た矮山も無
し。二人は皆に其の胸中に有る所を写す。高と矮とを論ぜず。襄又た識す。

武内確齋が言うには、わたくし山陽の描く山はいつもあまりに高く、竹田
の描く山はいつもあまりに低い。人の心がその顔に表れるように、筆致にもま
た同じように表れる。淀川の兩岸には、二人の描くような高い山もなく、また
低い山もない。二人はいずれも自分の胸中の景色を描いたのであって、高いか
低いかなどを論じるべきではない。襄が追って記した。

画面の上部の左側に書かれている漢詩文は竹田による。以下の通りである。

柳底風多日欲春	柳底に風多く日 春かんと欲す
小舟繁處水淙々	小舟の繁き処 水淙々たり
相逢縦負五年約	相逢ふ 縦ひ五年の約に負くとも
政爾都門又聚蹤	政に爾り 都門に又た蹤を聚む

六年前与山陽盟兄分手岡城日有不出五年必見君及都門聚迹偏如易之句此日舟次
邂逅相得甚樂故有此作 田憲 竹田 田舎兄

六年前、山陽盟兄と岡城に手を分つ。曰く、五年を出でざる有りて必ず君に見
えん、と。都門に迹を聚むるに及び、偏に易の句の如し。此の日、舟次に邂逅
し、相い得て甚だ楽し。故に此の作有り。田憲。

柳の下には風がしきりに吹き、日は春かんと、すなわち、沈もうとしている
る。小舟が繁く行き交い、水はさらさらと流れている。5年以内に再開する
という約束には反するが、確かに都に再び落ち合うことができた。六年前、岡城
で盟兄の山陽と別れた。そのとき山陽は、五年以内にきっと君（竹田）に会え
るだろうと言った。そして、京都への途上で再び落ち合うことになったことを
思うと、その言葉はどこか易の句（占いの言葉）のようにも響く。この日、舟
旅の途中で邂逅し、意気投合し、大変楽しんだ。そこでこれを作ったのであ
る。

以上で作品上部の賛の読解を終える。ここからは、その内容を手がかりに、

下部の山水画をみていく。

まず、竹田の詩に「日欲春（日 春かんと欲す）」とある通り、情景は日暮れ前である。水墨で描かれているため色は描き込まれないが、さらさら流れる川面は、沈む日に照らされて、鑑賞者の想像のうちに輝きを帯びる。

画面の下辺には2本の枝垂れ柳と岸の岩々が据えられる。高い柳の幹はわずかに屈折しつつも上へ勢いよく伸びており、低い柳がそれに沿うように配されている。柳の葉先は川下へとそよぎ、「柳底風多（柳底に風多く）」の語を視覚化している。これらは前景をなしていると同時に、川面へ視線を向けさせる幕として機能しているように思われる。すなわち、柳と岩が、俗世（画面のこちら側）と、舟に浮かぶ文人たちのいる別天地（精神世界、あるいは理想郷）とを隔てる垣根のように働き、鑑賞者はその隙間から別天地を垣間見る位置に置かれるのである。なお、竹田の漢詩には「小舟繁處（小舟の繁き処）」とあるが、画面では他の舟はあえて捨象され1艘のみが残されている。

さらに、対岸の奥には、擦れた筆致による山並みの高低が、前の柳の高低に呼応するように描かれている。山陽は「澱江左右無高山又無矮山（澱江の左右に高山なく、また低山もなし）」と述べているが、実際、桜宮付近に描かれているような山はない。にもかかわらず山が配されているのは、「寫其胸中所存（其の胸中に有る所を写す）」という理念による。これはまた柳の奥の別天地性を強調しているかのようでもある。したがって本作は、もちろん実際の舟遊びを題材としつつも、その場면을写實的に記録するのではなく、素晴らしい時と場所を共にしたという、竹田と山陽が共に抱いたであろう詩情の、さらに磨き上げられた結晶化であるように思われるのだ⁷⁾。

以上、《澱川邂逅之図》を読み解いてみた。ただし本作は、竹田の1823年の京遊の序盤の作品である。竹田の旅はこの後も長く続き、山陽との交遊もいっそう重ねられる。次節では、その様子を《蘭竹同瓶図》を例に紹介する。